人生の間違い探し

のぉ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人生の間違い探し

【Ｎコード】
Ｎ４６５１Ｉ

【作者名】
のぉ

【あらすじ】
この物語は、私の半生を描いたものであり、すべて実話です。
かなり異常な光景が描かれていると思いますが、引くことなく最後まで読んでいただければ幸いです。

はじめに

私は昭和五十年に大阪のある町で、複雑な家庭環境の中に生まれた。
母方の祖父母の家で、祖父、祖母、母、兄、母の姉、その息子二人、
そして婿養子ではない、言わば“マスオさん”状態の父の九人家族。

伯母は、旦那（私の義理の伯父）の家が徒歩数分の場所にあったが、
大半は祖父母の実家で暮らしていた。
それは、別に夫婦関係が破綻していたというわけではない。

祖父と祖母は仲が悪く、ケンカばかりしていた。
祖父が若い頃は、毎日のように酒を飲んでは酔っ払って家に帰り、
管を巻いて大変だったらしい。

だから伯母と母が祖父母の家に残ったのは、祖母のワガママだった。
娘が二人とも家を出てしまうと、大嫌いな祖父と二人きりになって
しまう。
それがイヤだったから、娘をずっと手元に置いておきたかったのだ。

またそれは、対祖父用戦力だけではなく、祖母が自分の手足となる、
いわば“奴隷”や“しもべ”的な存在を確保したいためでもあった。
こうして長女（伯母）は近所に住む旦那と、そして次女（母）は、
家に来てくれる旦那と結婚した。

そして晩年は、祖母の思惑どおり、年老いて大人しくなった祖父に
対し、娘二人を味方につけた祖母軍のほうが強くなっていった。

実は祖父母には、長男がいる。
私の母の八つ年下で、戦後間もない昭和二十三年生まれ。

貧しくて食糧難の時代を生き抜いた祖父母一家は、長男がちょうど多感な年頃のときに、両親が毎日のようにケンカを繰り広げていた。聞くところによると、祖父は浮気もしていたらしい。

そんな光景にショックを受けて、長男は統合失調症、いわゆる精神分裂病になってしまった。
現在もなお、病院に入院中だ。

一人息子がそのような病気にかかってしまったこともあり、祖母の孫に対する愛情と憎悪は異常なものがあった。
孫は四人全員が男で、自分の長男と重ね合わせていたに違いない。

初孫は伯母の長男で、私より十五歳も年上のいとこ。
しかし、その初孫も、小学生の頃に病気になってしまう。

このことは、祖母をかなり神経質にさせたのだろう。
病気が治った後でも、祖母はいとこを学校へは行かせなかった。

小学校はなんとか卒業できたものの、中学校は三年間、ろくに出席していないらしい。
なので中学校側も、卒業させるわけにはいかないという姿勢だった。
しかし、卒業式の日に中学校に押しかけ、無理矢理卒業させた。

その後、高校にも通わず、職にも就いていない。
まともな社会生活は営んでいない。
もちろん独身のままだ。

父親（私から見たら義理の伯父）は他界し、母の姉（伯母）ももう七十歳を超えている。

伯母が死んだら、どうするつもりなのだろう？
「だから自立できるように、今は一人で何でもやらせている。」
と伯母は言うが、私はどう考えても手遅れだと思う。

二人目の孫は伯母の次男で、私より十歳年上のいとこ。
勉強好きということもあり、高校、大学と順調に進学した。
そして祖父と同じく、国税局で働いている。

しかし、真面目すぎたがゆえに、祖母の理不尽な言動に影響を受け、
実社会とのギャップについていけず、ノイローゼになってしまった。
そして常に訳の解らない独り言を発しては、家族に絡んでくる。

私は彼がノイローゼになってしまったことにいち早く気づいたので、
精神病院に通院させることを提案した。
しかし、私が一番年下というだけで、話を聞き入れてもらえない。
むしろ、年上に向かってなんて事を言うのかと怒られる始末。

年齢さえ上であれば、その者がいくら間違ったことを言っていても、
年齢が下の者が従わなければならない。
祖母の教えは、年齢こそがすべてだった。

上が正しいことを言って、正しいことを教えてくれるのなら良いが、
祖母の言うことはいつも奇天烈で、間違ったことばかりだった。
ましてやヒステリックで、家族に非難されようものなら、家の中に
庭の土を撒き散らすなど、どうしようもない存在だった。

三人目の孫は母の長男で、私より五歳年上の兄。
鉄道が大好きで、時刻表が愛読書だった。
とにかくワガママで暴れん坊。
なので、兄なのに精神年齢は自分より低いと感じていた。

そして、とっつきにくい印象を持っていた。

そして私は四人目の孫。
母の次男だが、言わば四人兄弟の末っ子みたいなものだった。
末っ子の私は、先ほども言ったように、“年上の言うことは絶対”
という我が家のしきたりに、常に抑圧を感じていた。
私の思いは、いつもやり場がなかった。

なので、私はイライラすることが多く、癇癪(かんしゃく)もちと言われた。
よく『樋屋奇応丸(ひやきおうがん)』を飲まされた。
小学校入学直前に、かんの虫に効く薬で有名な和歌山県橋本市まで
行った事もある。
当然、“行かされた”が正しい言い方であるが…。

最初の記憶

生まれてから最初の記憶って何だろう？

台所にあったテーブルの高さと自分の身長が全く同じで、テーブルの高さを測ったらちょうど一メートルだった。
だから自分の身長はいま、一メートルだと知った記憶だろうか。

それとも、四歳の誕生日を迎えて間もない頃に、庭で遊んでいて、義理の伯父に
「いくつになったん？」
と聞かれ、四歳になったとわかっていながらもふざけて
「三歳」
と答えた記憶だろうか。

それとも、スーパーでの買い物帰りに自転車の後ろに乗せてもらい、母に年齢を聞いた記憶だろうか。
そのとき母は、三十九歳と答えた。
ということは、少なくとも私は四歳三ヵ月を過ぎていたことになる。
今年で三十九歳という意味で答えたのでなければの話だが。

それとも、当時放送していたアニメ世界名作劇場『ペリーヌ物語』に出てくるキャラクターのバロンのぬいぐるみを、おもちゃ屋さんで買ってもらった記憶だろうか。
このアニメは、一九七八年一月から十二月まで放送されていた。

タイムボカンシリーズの『ヤッターマン』は、いとこが大好きで、一緒に見ていた記憶がある。
こちらは、一九七七年一月から一九七九年一月まで放送されていた。

『一発貫太くん』というアニメも、楽しみに見ていた記憶がある。
移動ラ式ーメン屋を営む母が、八人のこどもとペットの犬の九人で
野球チームを結成し、鍛えていくホームコメディアニメ。
こちらは、一九七七年九月から一九七八年九月まで放送されていた。

これらは、私が二歳から三歳の間に放送されていたことになるので、
見ていたのが再放送でなければ、この記憶が有力かもしれない。

私は幼稚園に通っていない。
保育園にも通っていない。

小学校に入学したとき、私以外のみんなは、顔見知り同士だった。
私だけが転校生状態で、なかなか溶け込めなかった。

そもそも、なぜ幼稚園に通わなかったのか。
それは、私が幼稚園に通うべき年齢になったときのこと。
母が
「幼稚園に行きたいか？」
と聞いてきた。

私は何を言っても
「みんな行ってるねんから、おまはんも行き！」
と言われ、どうせ通うことになるのだと思ったので、あえて
「イヤ！」
と、幼児特有の天邪鬼な回答をしてみた。

また、“幼稚”という単語が好きではなかったし、家族によく
「幼稚やね」
と言われたことを、コンプレックスに感じていたのも原因だった。

しかし、母の返事は
「ふーん。そうか、わかった。じゃあ断っとくわ。」
だった。

この予想外の展開には衝撃を受け、前言撤回する余裕もなかった。
こうして、幼稚園に通わないことが決定した。
私が親なら、子供に意志を聞かず、通わせるのだが…。

小学校に入ってから苦労するのはこども。
かわいそうなのは全部こども。
こどもにはこどもなりの社会があり、幼稚園で覚えることもある。

小学校に入っていきなり、
「誰や、あいつ？」
というような視線をどれだけ感じたことか…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4651i/

人生の間違い探し

2010年11月2日02時50分発行